

きものなれ。

この通り梶子の評判が、高くなりまして、寶永時代の大呼物となりましたが、遂には梶の葉といふ家集まで遺して、後の世の人々の玩び草となりました。梶子は又誹諧にも書をかくことにも上手でありまして、百合子の母に當り、池野大雅堂といふ有名の書かきの女房町女の祖母にあたりて居ます。この二女子も有名なる文人であります。その事は後日折ができましたならば、お話することにいたしましたしよう。

名のりけり

抑これは

秋の月



文苑

山家月

秋の夜の月のひかりはきよけれど
水野忠敬

わかやまごとは訪ふ人もなし
諏訪忠元

何處にて見るも同じきつきかげの
相澤木

ことさらすめるやまざとの月
相澤木

雲霧をはらふ軒端のやまかぜに
小ざゝさやきて月いでにけり

赤堀信成

山をいでし賢き人にすてられて

木こりの軒にすめる月哉

矢田香圃

月すみて瀧の音すみて夜もすがら

こゝろもすめるやまかけの庵

山崎房吉

ふくるまで笛の音さこゆ山がつも

かたぶく月のかげをしむらし

石搏千亦

月見ひとやまの修業者とぶらへば

たゝ一人してかひならしをり

横山碩

てる月のみやこに遠くいほりして

一人ぞわがみる秋の長夜を

安藤直方

朝夕にながむるみねのまつならで

さはるものなし秋の夜のつき

土田道一

山里もうつりゆく世のかはらぶき

かはらぬ月をなかめけるかな

増山三雪子

世をすてしわれをも捨ず草の月に

すめるもうれし秋の夜のつき

板倉止子

ましらなく聲はとだえてわが山の

まつにのほりぬ秋の夜のつき

板倉藤子

さびしさをとふ人もなきやま里は

さしいる月をとともと見るかな

頭本春子

さびしさに月もともなる心地して

一夜あかしつやまかげのいは

奥村岸子

本の間もる月を哀となかむれど

かたるともなき山かげのいは

峰百合子

月みんととひこし友のもてなしに

くりの飯たくあきのやまざと

大竹以勢子

山ふかくむすびし庵もあきの夜は

月にとひくるひともありけり

渡邊須磨子

すみのぼる月のかげのみ昔にて

山もうき世になりけるかな

加藤ひな子

ながむればわか世の秋も更にけり

山かげ庵のありわけのつき

設樂御幸子

我山はいはへのやまのうへなれば

月のみやこもちかく見えけり

水橋康子

かり人の妻にやあるらん扉あけて

雁なくかたのつきぞながむる

大河内桂子

うつりゆく都のさまをよそにして

わかやまさとの月をみるかな

佐々木雪子

都へとすゝめらるれどやまずみの

ことしもみたり秋の夜のつき

印東昌綱

今日も又かりのゑものゝ少なくて

柚かいほりの月をみるかな
佐々木信綱

山水にうつろふ月のかけきよし

よつのをごとのちりや拂はむ

月前雲 東くめ子

月の前ゆく うきくもを

心なしとや かこつべき

くまなき影を なほぬぐひ

光をみがく 物と見ば

花のかげ 小林つねを

優しことふよ 花のかけに

むかしの夢や かたらまし

こがねの色の 香にゑひて

にはへる花も 捨ていにし

屑うるはしや なれのごと

かよわき君よ いまいづこ

やさし小蝶よ 花のかけに

昔のゆめや かたらまし